

雌阿寒岳の火山活動解説資料（令和7年12月）

札幌管区気象台
地域火山監視・警報センター

雌阿寒岳では、10月26日以降噴火は観測されていません。

ポンマチネシリ火口付近では、9月12日から観測されている火口方向が上がる傾斜変動が緩やかに続いており、火口浅部の膨張した状態が続いていると考えられます。また、96-1火口の噴煙活動は引き続き活発です。火山活動の活発な状態が続いていると、ポンマチネシリ火口から約500mの範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。

ポンマチネシリ火口から約500mの範囲では、噴火に伴い弾道を描いて飛散する大きな噴石に警戒してください。地元自治体などの指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

風下側では火山灰や小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

令和7年9月15日に火口周辺警報（噴火警戒レベル2：火口周辺規制）を発表しました。その後、警報事項に変更はありません。

○活動概況

・噴気など表面現象の状況（図2、図5-①②⑤、図6-①③、図8-①～⑥）

10月26日以降、噴火は発生していません。

ポンマチネシリ96-1火口では、9月12日以降、噴煙の量の増加した状態が続いている。9月下旬以降は緩やかな低下傾向が認められていますが、今期間も最高で火口縁上400mまで上がるなど、引き続き活発な状態です。

その他の各火口の噴気の高さ（いずれも火口縁上の高さ）は、赤沼火口では100m以下、北西斜面06噴気孔列では100m未満、中マチネシリ火口では200m以下で経過しており、噴気活動は低調な状態です。

・ポンマチネシリ96-1火口周辺の全磁力の状況（図6-②④）

全磁力連続観測では、ポンマチネシリ96-1火口の噴煙が増加した9月12日以降、96-1火口付近の地下の熱活動の高まりを示唆する全磁力値の減少がみられ、その後も緩やかな減少傾向が続いている。

・地震及び微動の発生状況（図3-②③、図4、図5-④⑦、図8-⑦⑧）

ポンマチネシリ火口付近の火山性地震は、9月中旬に増加したのち、10月頃以降は概ね少なく経過していますが、引き続き、活発化前と比べてやや活発な状態です。

震源はポンマチネシリ火口付近のごく浅い所～深さ1km付近、中マチネシリ火口付近の深さ1km付近に分布しました。

火山性微動は、9月13日以降観測されていません。

この火山活動解説資料は、気象庁のホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/kazan/kazanyougo/mokujii.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、北海道大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所、北海道及び地方独立行政法人北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータを利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図10mメッシュ（火山標高）』、『数値地図50mメッシュ（標高）』、『電子地形図（タイル）』及び『基盤地図情報』を使用しています。

次回の火山活動解説資料（令和8年1月分）は令和8年2月9日に発表する予定です。

・地殻変動の状況（図3-①、図5-③⑥⑧、図7、図9）

ポンマチネシリ火口近傍の阿寒富士北2観測点では、9月12日の火山性微動に伴いポンマチネシリ火口方向が上がる傾斜変動が観測され、それ以降は次第に緩やかになりながらわずかな変動が継続しています。ポンマチネシリ火口浅部では、膨張した状態が続いていると考えられます。

GNSS連続観測によると、おもに東側山麓の観測点で8月末頃から山体付近の膨張を示すと考えられるわずかな伸長が観測されています。

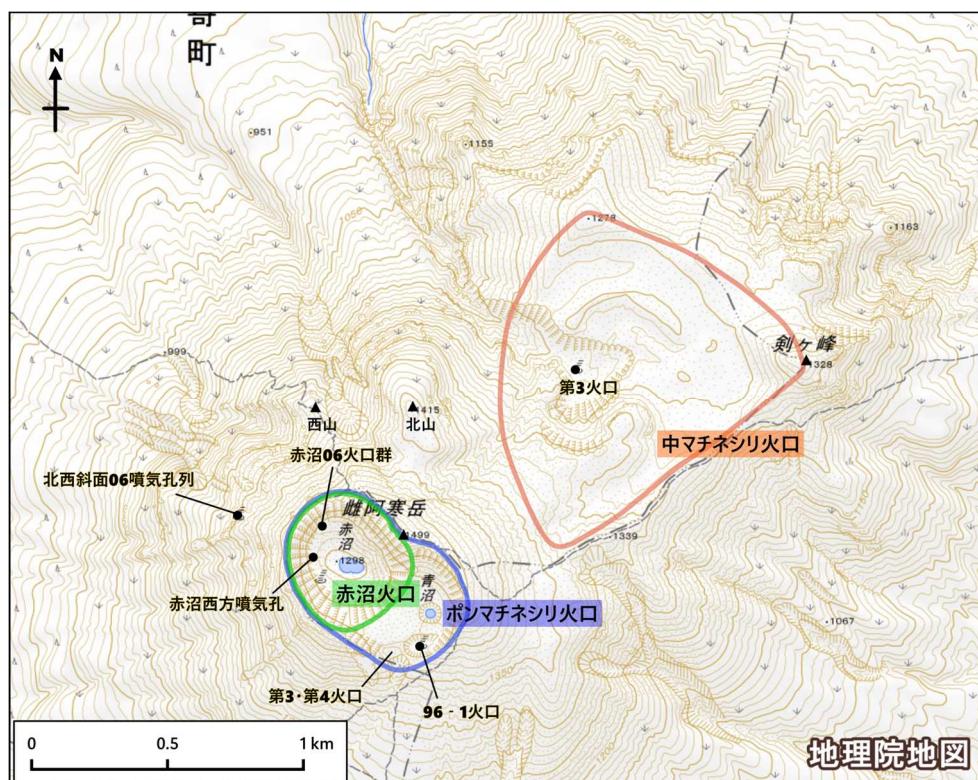


図1 雄阿寒岳 火口及び噴気孔の位置図

各火口の火口縁は、概ねの範囲を示すものです。



図2 雌阿寒岳 各火口、噴気孔の噴氣（噴煙）の状況

かみてしべつ
上：上徹別監視カメラによる（雌阿寒岳の南東側から）

下：オンネトー展望台（道）監視カメラによる（雌阿寒岳の西側から）

・96-1火口の噴煙は、9月12日以降増加し、その後も活発な状態が続いています。

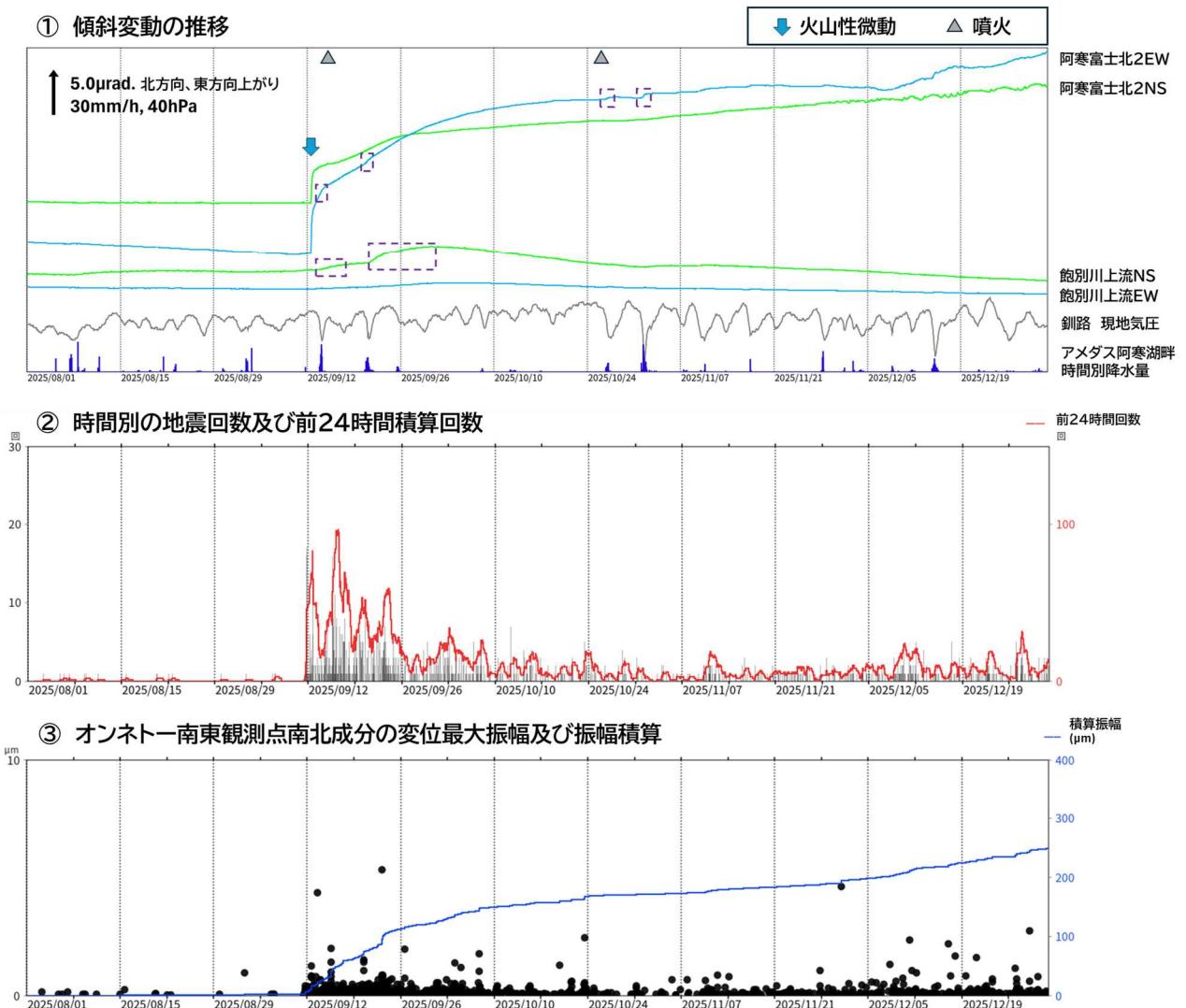


図3 雌阿寒岳 傾斜変動の推移及び火山性地震の発生状況（2025年8月1日～12月31日）

- ①の紫破線内では、降水や気圧変動の影響と考えられる変動が認められます。
- 9月の噴火は、9月12日から15日の間に発生したと考えられます。
- 期間内に発生した火山性地震はポンマチネシリ火口付近の浅部がほとんどを占めました（図4参照）。

- 9月12日の火山性微動に伴い、主に阿寒富士北2観測点でポンマチネシリ火口方向が上がる傾斜変動が観測され、その後も緩やかに変動が続いている。12月上旬から変動方向にやや変化が認められています。
- 地震活動は、10月頃以降は概ね少なく経過していますが、12月以降、一時的にやや増加が認められるなど、引き続き9月の活発化前と比べてやや活発な状態です。

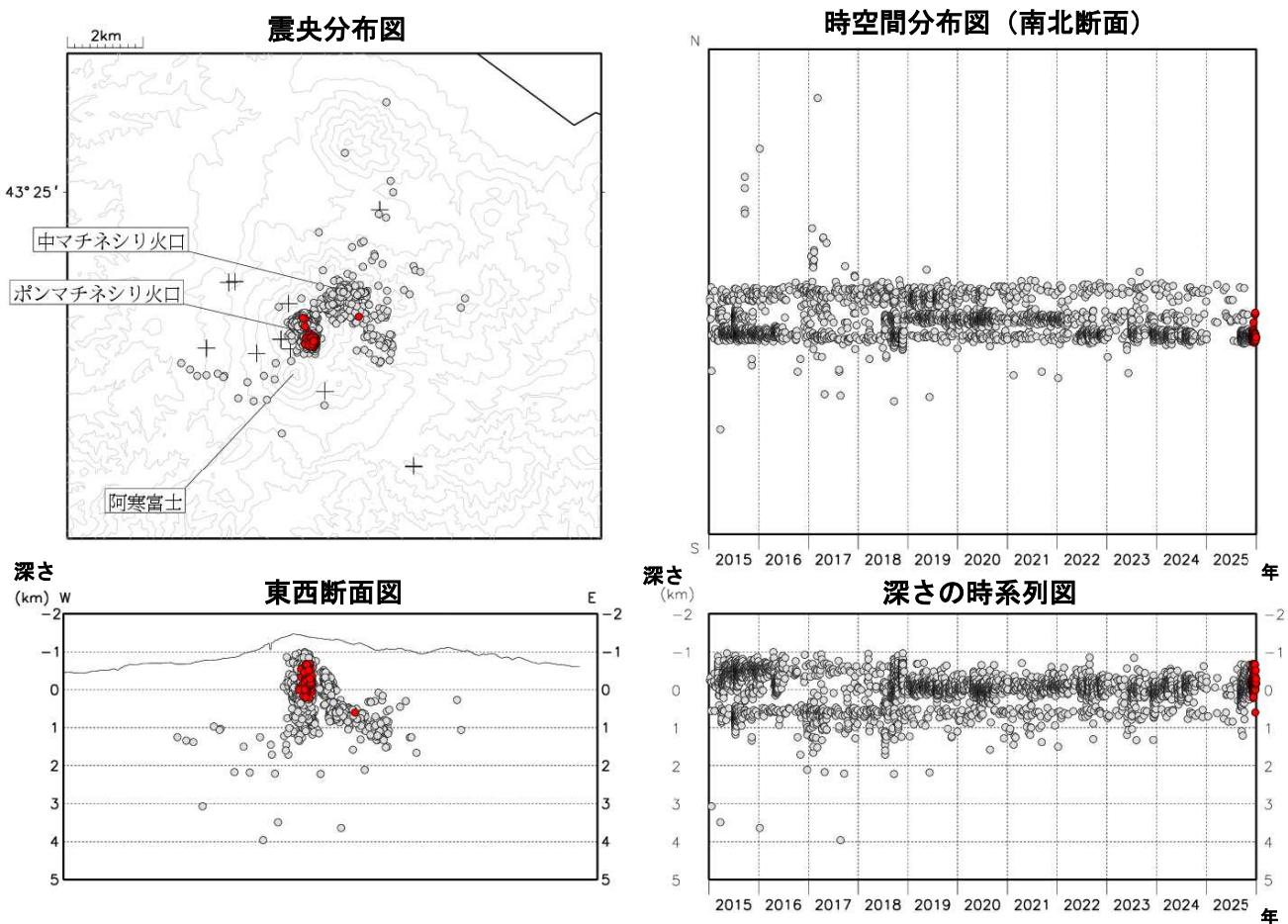


図4 雌阿寒岳 火山性地震の震源分布（2015年1月～2025年12月）

●：2015年1月～2025年11月の震源 ●：2025年12月の震源 +：地震観測点

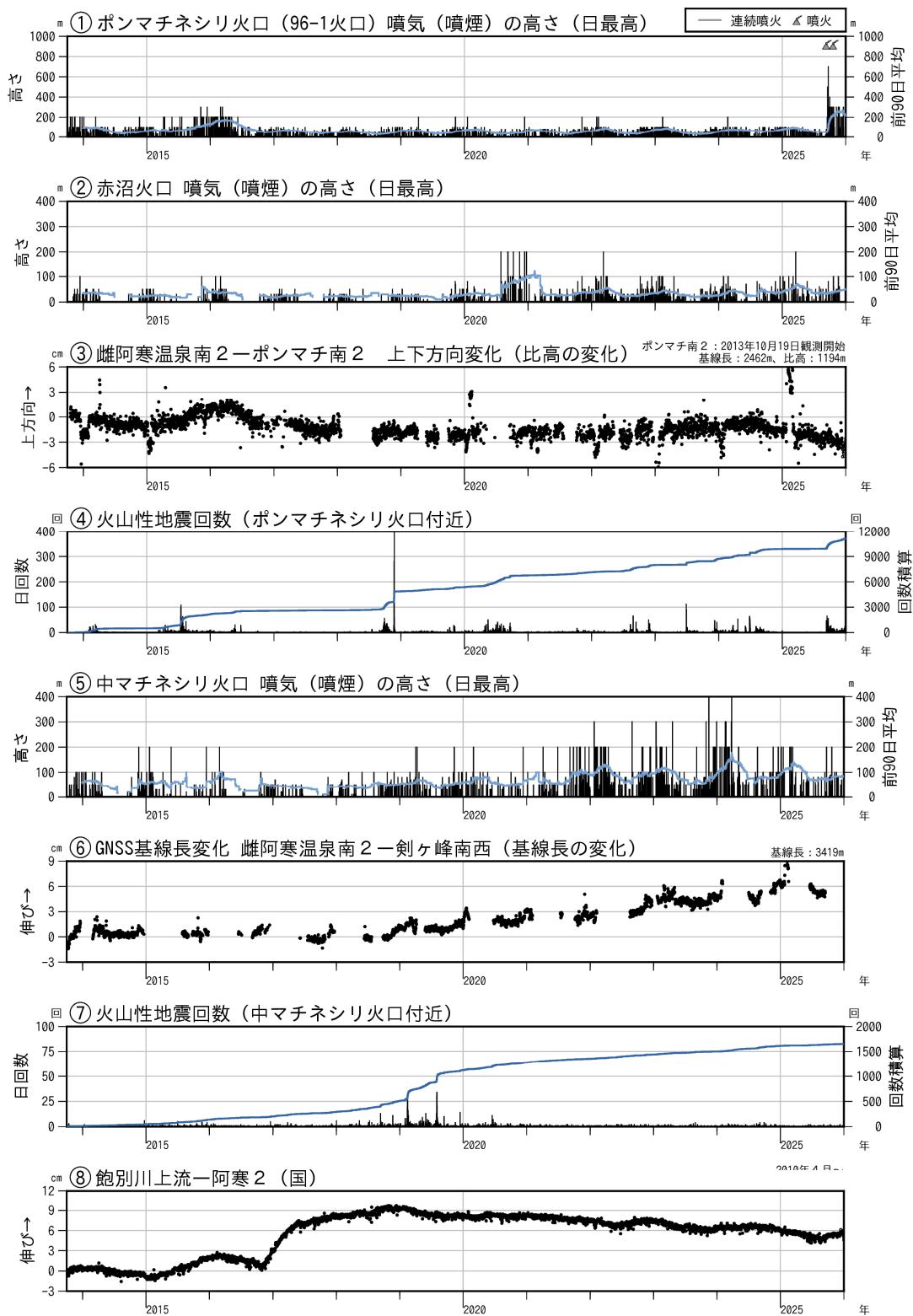


図5 雌阿寒岳 火口別の活動経過図（2013年10月～2025年12月）

- 各火口の位置は図1を参照してください。
- グラフ③、⑥、⑧は、それぞれGNSS連続観測の基線図（図9）基線④、⑦、⑨に対応しています。
- グラフ④、⑦の回数は、雌阿寒岳付近で発生したと計数した地震のうち、発生領域が明瞭に識別出来たもののみを計数しています。
- ポンマチネシリ火口付近の地震活動は、9月の活発化前と比べてやや活発な状態です。また、96-1火口の噴煙の高さは、9月12日以降、高い状態が続いている。
- 中マチネシリ火口付近の活動状況を示唆する観測データに特段の変化は認められていません。

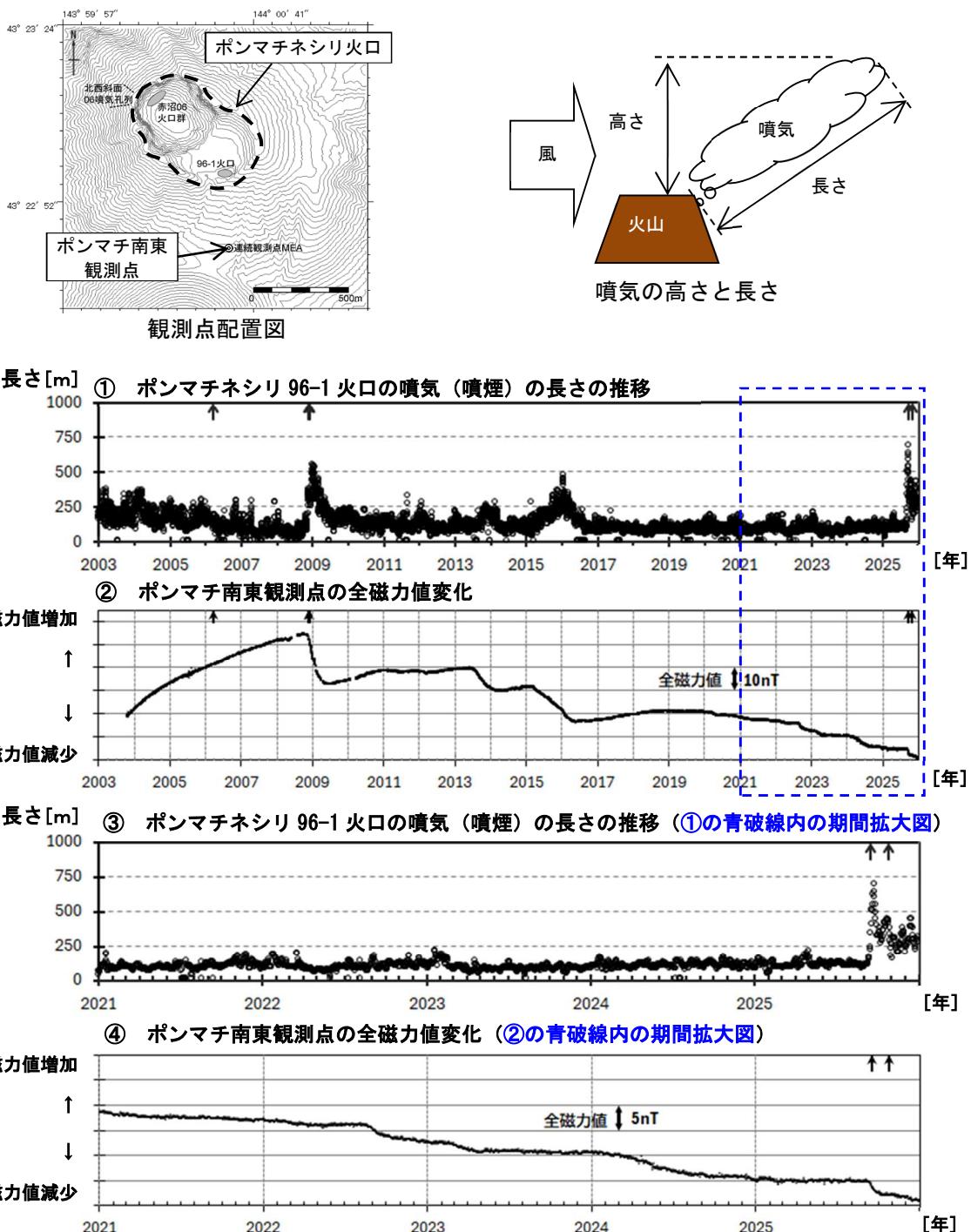


図6 雌阿寒岳 ポンマチネシリ96-1火口の噴気（噴煙）の長さと全磁力値の経過及び全磁力観測点配置図（2003年～2025年12月）

- ①③のグラフに示す噴気の長さは気温の影響を受けることから（気温が低いと噴気は長くなり、高いと短くなる傾向がある）、気温補正後の値をプロットしています。
- ②④のグラフに示す全磁力値は、地磁気観測所と満別観測施設との全磁力値差をプロットしており（表示開始は2003年10月16日）、空白部分は欠測を示します。
- 図中の↑は噴火を示します。ただし、2006年の噴火は赤沼火口からの噴火です。また、2025年9月の噴火は、9月12日から15日の間に発生したと考えられます。
- 96-1火口の噴煙の長さは、2025年9月12日以降、増大しています。9月下旬以降、緩やかに衰退が認められますが、引き続き活発な状態です。
- 96-1火口南側のポンマチ南東観測点で、9月12日以降、96-1火口近傍の地下における熱活動の活発化を示すと考えられる全磁力値の減少がみられ、10月以降も緩やかな減少が続いている。また、中長期的には、2020年頃から全磁力の緩やかな減少がみられています。

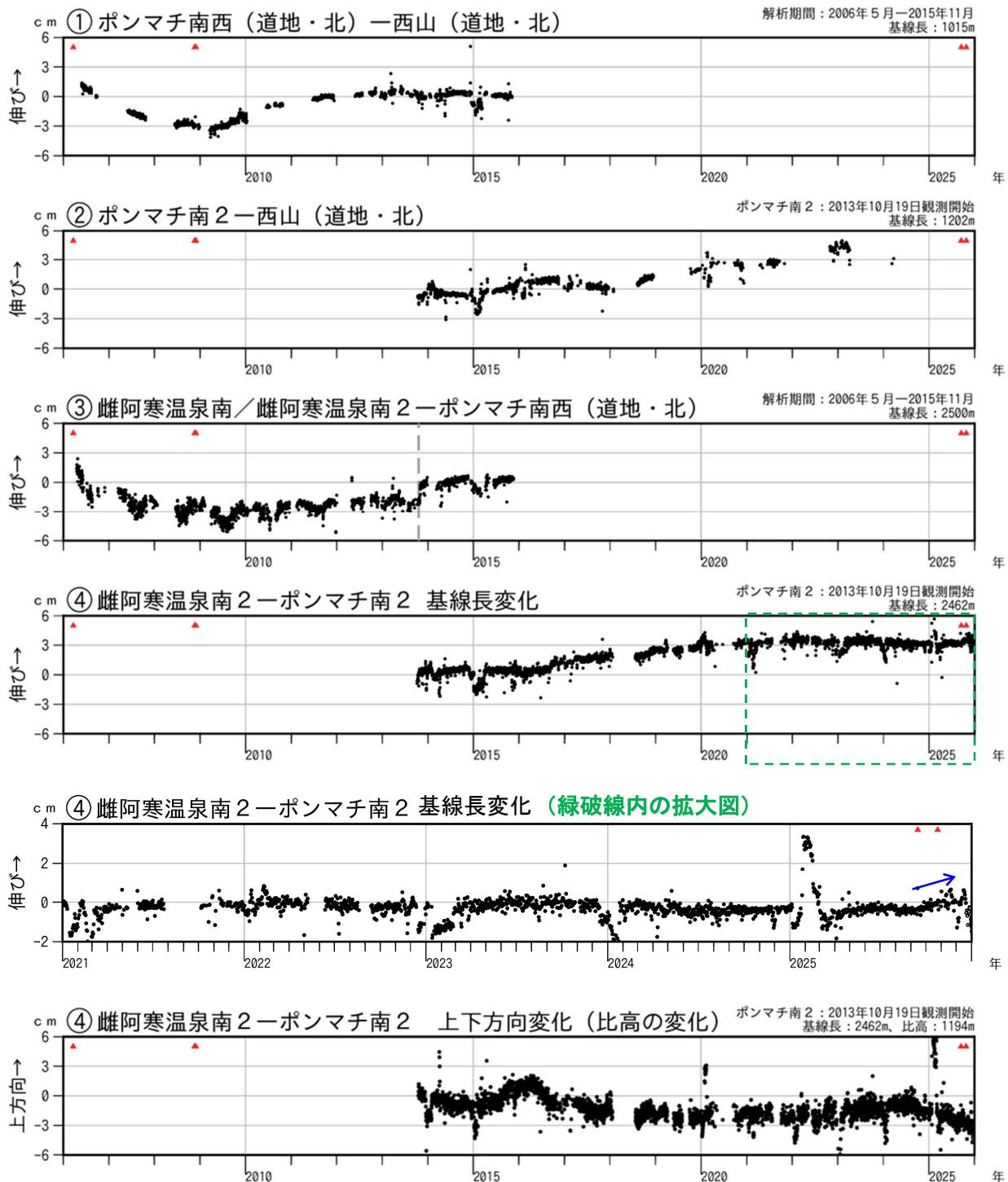


図7-1 雌阿寒岳 GNSS連続観測による基線長及び比高の変化（2006年4月～2025年12月）

- ・グラフ①～④はGNSS連続観測の基線図（図9）の基線①～④に対応しています。
- ・▲はごく小規模な噴火の発生を、空白部分は欠測をそれぞれ示します。
- ・ポンマチ南西（道地・北）とポンマチ南2はそれぞれ別の場所に設置された観測点ですが、基線②は①、基線④（基線長）は③と類似した推移を観測していると考えられます。
- ・基線③の点線（2013年10月19日）前後で雌阿寒温泉南から近傍の雌阿寒温泉南2に観測点を移設しています。
- ・グラフ④は基線④の基線長と比高を別個に描画しています。比高は雌阿寒温泉南2からみたポンマチ南2の上下方向の動きを表しています。
- ・冬季に凍上や積雪の影響によると考えられる変動がみられる基線があります。
- ・基線④（基線長）では、2025年9月中旬以降ごくわずかな伸長（青矢印）が認められます。

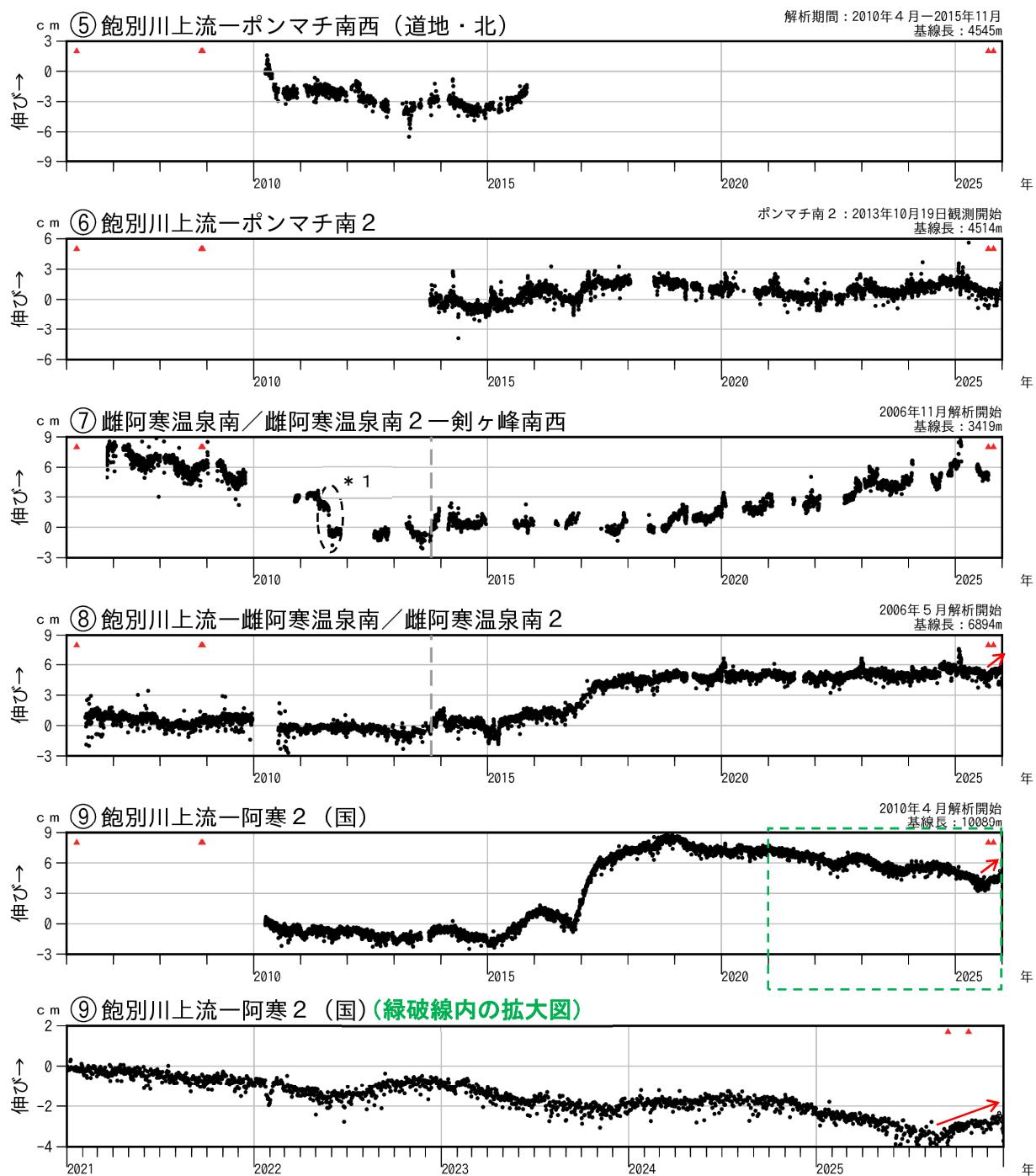


図7-2 雌阿寒岳 GNSS連続観測による基線長の変化（2006年4月～2025年12月）

- ・グラフ⑤～⑨はGNSS連続観測の基線図（図9）の基線⑤～⑨に対応しています。
- ・▲はごく小規模な噴火の発生を、空白部分は欠測をそれぞれ示します。
- ・* 1：ステップ状の変化（黒破線内）は機器変更によるものです。
- ・ポンマチ南西（道地・北）とポンマチ南2はそれぞれ別の場所に設置された観測点ですが、基線⑥は⑤と類似した推移を観測していると考えられます。
- ・基線⑦⑧の点線（2013年10月19日）前後で雌阿寒温泉南から近傍の雌阿寒温泉南2に観測点を移設しています。
- ・冬季に凍上や積雪の影響によると考えられる変動がみられる基線があります。
- ・山麓の観測点を含む組み合わせの基線⑧⑨では、2025年8月末以降、伸長傾向（赤矢印）が認められます。
- ・基線⑦では2019年頃から中マチネシリ火口付近浅部の膨張を示唆するわずかな伸長傾向が認められます。

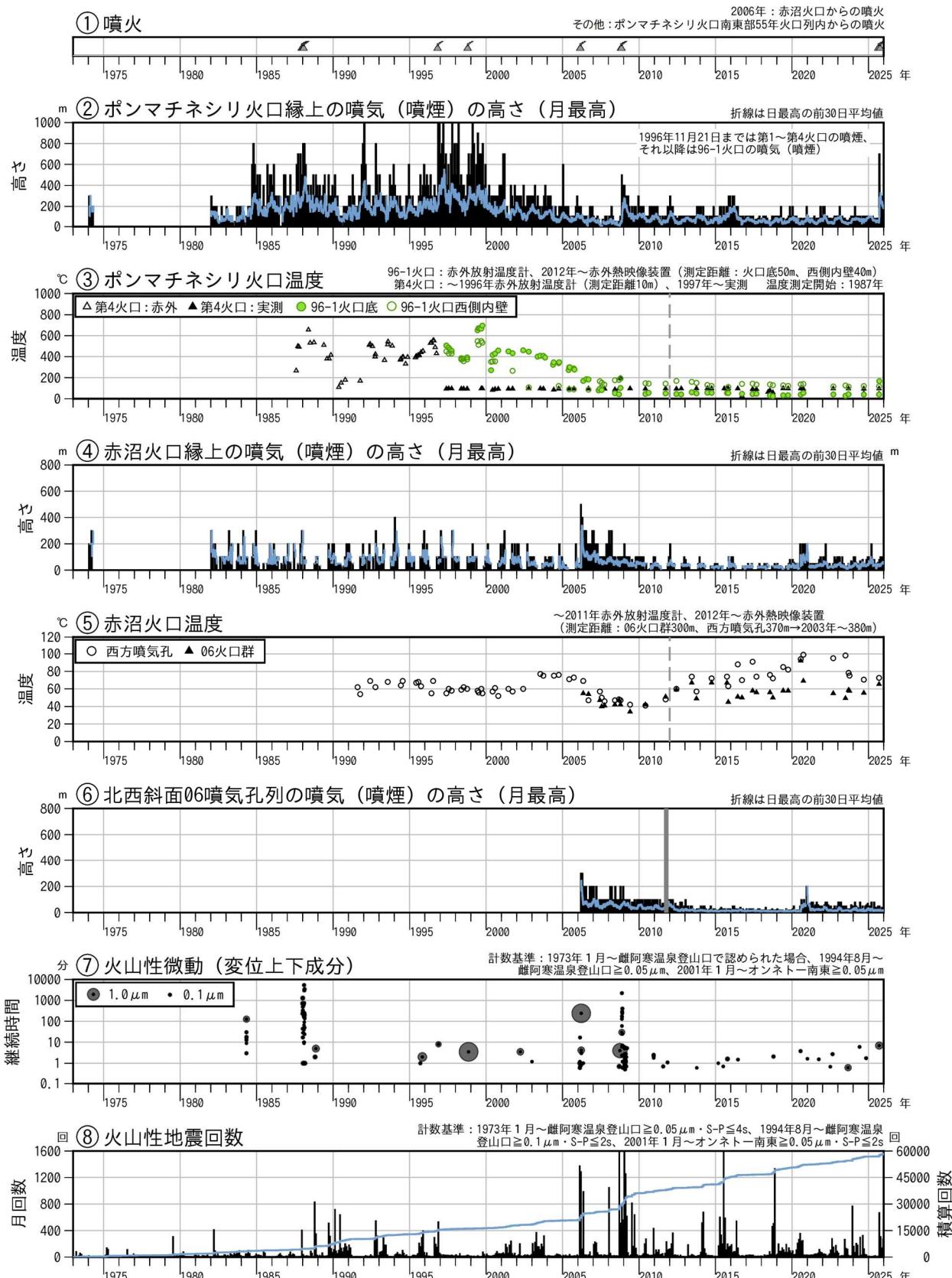


図8 雌阿寒岳 火山活動経過図（1973年1月～2025年12月）

- ③: 各火口温度は北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所のデータを含みます。
- ③⑤: 測定機器の変更により、2012年（破線）前後では測定温度に差が生じている可能性があります。
- ⑥: 灰色部分は機器障害による欠測を示します。
- 各火口の位置は図1を参照してください。

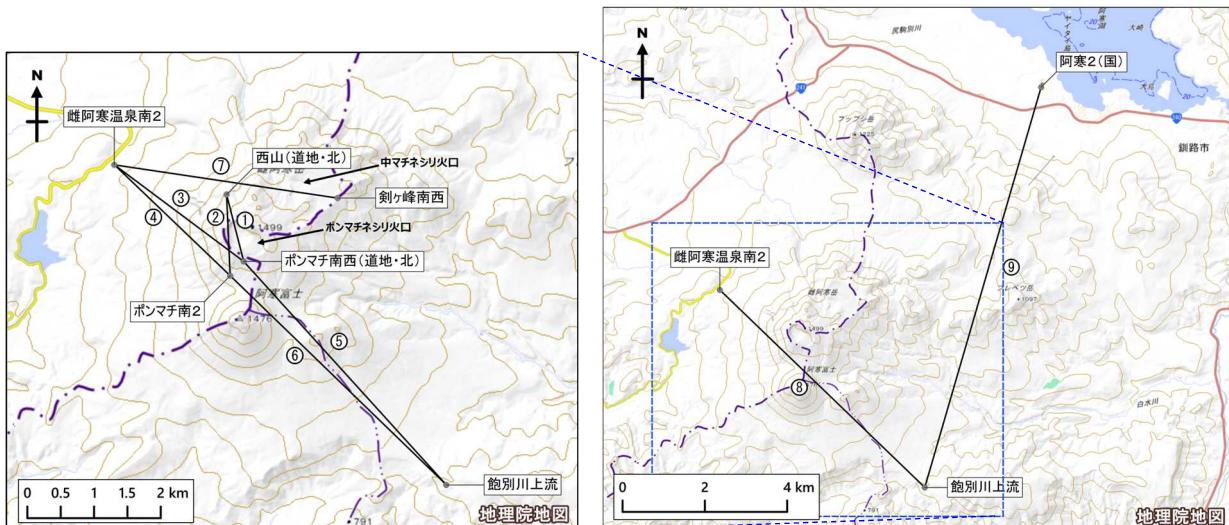


図9 雌阿寒岳 GNSS連続観測の基線図

- ・基線番号①～⑨は、図7のグラフ①～⑨に対応します。
- ・基線④、⑦、⑨は、それぞれ図5のグラフ③、⑥、⑧に対応しています。

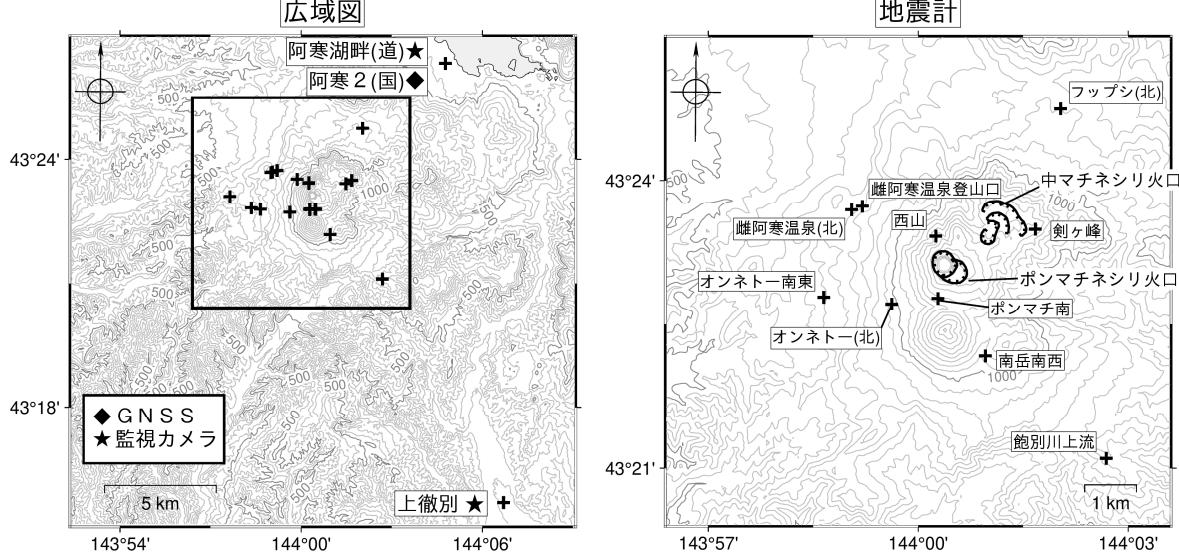


図10 雌阿寒岳 観測点配置図

各機器の配置図は広域図内太枠線で示した領域の拡大で、+印は観測点の位置を示します。

気象庁以外の機関の観測点には以下の記号を付しています。

(国) : 国土地理院 (北) : 北海道大学 (道) : 北海道
(道地) : 北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研究所